

「引き籠っている人に出口を」

2019年06月05日

川崎市で、スクールバスに乗ろうとしていた子どもたちと保護者が襲われ、11歳の少女と外務省に勤める保護者が刃物で殺害され、18名が傷害を受けるという痛ましい事件が起こった。これから人生が始まる少女と外務省で信頼されて仕事をしていた人はどんなに悔しく思ったであろうか。また、その家族は現実を受け入れられず、言葉にならない悲しみのどん底にあるだろう。命は奪われずとも、傷害を負った子どもたちも心に深い傷を負い、立ち直るまでには、相当の時間を要するであろう。最近、「誰でもいいから、殺したかった」という加害者の言葉を聞く。殺人は相手に対してやむにやまれぬ理由があって、犯すものと思っていたが、無差別殺人が起こっている。それだけ、心が鬱積し、荒んでいるということであろう。

今回、加害者は下見に行っているらしいから、ターゲットは決めていたのではないか。そして、多数の刃物を用意していたことから、覚悟の決行であろう。直ぐに自殺したので、この事件の真相は掴み難い。新聞やテレビ関係者も憶測して報道することがあるのではないか。彼は家庭環境に恵まれず、引き籠りがちであったという。居場所を無くし、やり切れない思いが一気に殺人へと向かわせたのか。彼の心の闇と絶望は深いものがあつたに違いない。

この事件に関し、「死ぬなら一人で死ね」という内容の言葉がネット上で飛び交い、議論が沸騰している。絶望して死ぬなら人を巻き添えにせず、一人で死ねという意味で、関係のない人を殺傷したことに対し、怒りを爆発させた感情的な言葉であろう。気持ちは理解できなくもないが、言うべき言葉ではない。その言葉は居場所を無くし、孤立を深めて苦しんでいる人には、無価値、無意味な存在の自分は消えてもいいんだという思いへと誘うのではないか。人に対して「死ね」という言葉は断じて発してならない。存在を全否定するような発言をする権利は、誰も持っていないからである。

川崎殺傷事件は大きな衝撃であったが、続いて起こった父親が息子を殺害した事件には恐怖を覚えた。農林水産省の事務次官を務めた76歳の父親が、引き籠りがちな44歳の息子を包丁で刺し殺した。息子は家庭内暴力を振るうこともあり、近くの学校の運動会の音がうるさいと腹を立てていた。父親は、「川崎市の20人殺傷事件が頭に浮かび、息子が周囲に危害を加えないようにしようと思った」という趣旨の供述をしていると報道されていた。息子が事件を起こす前に、自分が解決したと聞き取れる。真面目な国家公務員が責任を取ろうとしたのかも知れないが、子どもの命は親の持ち物ではない。父親の発言を受け入れるならば、引き籠りがちな人の命が保障されないし、引き籠りがちな人の自殺を誘発し、まかり間違ふと犯罪にも結びついてしまう。

40歳から64歳までの中高年の引き籠りが61万3千人もいるというから、若年層を加えると、100万人を超えているのではないか。私も、数人の引き籠りの家族と関わった。本人とは直接関わらず、何の役にも立たず、無力感のみが残った。しかし、引き籠る人はナイーブで優しい人たちであった。彼らの苦しみを思うと、何とか出口はないものかと思う。だが、言えることは、無神経な発言や行動によって彼らを追い込まないことである。自分は駄目な人間だ、自分は生きる価値がないと思い込んでしまう状況から、あなたも私も生きていいのだという大らかな楽観を受け入れる土壌を醸成していくことが、大人たちのやるべきことではないかと、二つの事件から痛切に思った。